

氏名	はやし 林 まゆみ
学位(専攻分野)	博士(農学)
学位記番号	論農博第2351号
学位授与の日付	平成13年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	中世民衆社会における造園職能民の研究

論文調査委員 (主査) 教授 吉田博宣 教授 祖田 修 教授 岩井吉彌

論文内容の要旨

造園職能民に関連した歴史的研究は少なく、特に中世の民衆社会で主体的に作庭にかかわった階層の成立要因や、その発展及び展開に関する説明は不十分であった。中世中期までは権門の内部組織や上層貴族が主体的に作庭を指揮し、下層の民衆では権門内における従属民をはじめとして在家や散所などが人夫的に末端の作業に携わっていた。

本論文では、中世後期において初めて、民衆社会の階層であり且つ被差別民であった散所や河原者が職能民として主体的に造園土木職能にかかわり作庭を行ったことの論証を展開したものである。以下、文献史料の分析と現地調査によりそれらの論考を行った。

序章では、研究史の総括を行った。既往研究の被差別民形成の歴史に着目しつつ、造園や土木職能民の形成史を概括し、課題の抽出を行った。

第1章では、造園職能民の形成として北野社にみられる事例を研究し、権門における造園職能民にかかわる階層である散所や河原者、神人、在家等の役割に関する詳細な分析を行った。その結果、中世中期まで造園職能に関しては在家や散所、河原者が協働していたが、中世後期に至ると河原者がその自立性や集団化、そして呪術性などの技能をもって作庭者としての地歩を固めていったことが知見された。

第2章では、造園職能民の完成者として善阿弥論の再検討を行った。庭者としての善阿弥はその比類なき才能と被差別民としての身分をばねに、作庭者として開花したという従来の説を批判し、善阿弥固有の才能や社会的地位への反発等の精神論以外に、その背後に控える職能技術集団の形成に支えられて輩出されたことを論証した。

第3章では、造園職能民の展開として京都に見られる他の事例を総合して検証した。ここでは、散所から河原者へと職能民が展開する中で、呼称の変化や賃金、身分等に関して論考を加えた。作庭には穢れを清める職能や土木的職能と不可分であった呪術性が深く関与していたことが実証された。また作庭にかかわる個人の背後には技術的な職能者や集団の存在が知見された。

第4章では、造園職能民の発展として近畿にみられる石垣を積む職能に注目した。ここでは、石垣普請にかかわる職能を伝承の検分や多くの史料を検討して論考した。また、現地調査等からも石垣普請の技術の発展を検証した。その結果、「穴太」と呼ばれた地域で散所や職人集団の形成がみられたことと、それ以外にも各地で在地の職能集団の形成とその発展が知見された。

結章では各章での知見を次のように総括した。すなわち、造園職能と賤民社会は相互に深い関係性を持っており、初期には散所が造園土木的職能に深くかかわっていたこと、また、散所の発展過程を追うことで河原者等も、職能民として形成されてきたことが知見された。階層に応じて穢れを清める職能も内容が分化していた。河原者は樹木等の取り扱いにも優れ対価も高く、技能者として個人名の呼称を有し、作庭にかかわる専門家として認知されていたことが理解された。河原者等の技能集団は組織化を進め、その技術的な発展と権門につながる機会ともなった穢れを清める職能や呪術性と相まって、造園職能民としての地歩を固めていった。

中世後期では河原者や散所等被差別民を中心として、様々な形態の職能民が形成され、各地でその技能を高めていった。さらにその技能を特徴づけるものとして、土着的な陰陽思想の展開や独自の自然観等に支えられてきたことが論考された。

以上、中世後期における民衆社会の中で形成されてきた造園職能民に関する論考を展開し、作庭集団すなわち造園職能民の形成史に新たな知見を得た。

論文審査の結果の要旨

作庭などにかかわる造園職能民に関する歴史的研究は多くない。本論文は、歴史学における被差別民の形成史研究や、土木或いは造園職能者の研究など、先行研究を総括したうえで、特に、被差別民であった散所や河原者に着目し、多くの文献史料の分析と現地調査により中世後期の民衆社会における造園職能民とその集団組織の形成について論じたものである。成果として評価される主な点は以下のとおりである。

1. 京都北野社の史料を詳細に分析し、中世において散所や河原者が作庭にかかわり、造園職能民としての地歩を固めていく過程を明らかにした。
2. 造園職能民の完成者としての庭者・善阿弥論の再検討を行った。すなわち、善阿弥はその才能と被差別民としての社会的地位への反発をばねにして成功した作庭者であるという先行研究での精神論に加え、その背後に控える職能技術集団に支えられたことの重要性を指摘し、その集団組織の形成過程と構造を明らかにした。
3. 河原者を中心とした職能民に支払われる賃金や呼称の変化などに関する多くの事例を検証することによって、彼等の作庭技能に対する評価の高かったことを明らかにするとともに、作庭へのかかわりは、穢れを清める職能や呪術性が深く関与したことを論証した。また、そのことが政治権力の中枢に対する信頼を高め、職能集団の形成にも寄与したという構造も明らかにした。
4. 近畿にみられる石垣積みの職能民に注目し、散所としての「穴太」と呼ばれる地域や、他地域における在地の職能集団の形成を論証した。
5. 多くの優れた個人の作庭者の言説を分析し、土地資産を持たず社会の下層に位置づけられた者として、それを克服すべく、技能と精神を磨き、芸術性にまで高めていった内的側面やその自然観等についてもより詳細に明らかにした。

以上のように、本論文は、中世後期における民衆社会に視点をおき、その中で造園職能民の形成に、作庭技能等それぞれの特性を持つ集団が一定の役割を果たしたことを明らかにした。それによって造園職能民の形成史に新たな知見を加えたもので、造園原論及び造園史に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成12年12月15日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。